博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　上村忠男

中上健次は文学のさまざまなジャンルのなかでもとりわけ「物語」というジャンルに強い関心を示し、このジャンルの可能性を実際に作品を書くなかで模索していった。そのさい、中上にあって特徴的であったのは、それをたんなる文学上の一ジャンルとして捉えるにとどまらず、そこに知の制度性――ミシェル・フーコーのいう〈エピステーメー〉――の根拠を見てとって、そうした制度性に抗する〈新たな物語〉のありようを志向したことであった。

師玉真理氏の博士学位請求論文「痩せゆく言葉と〈物〉の背理――中上健次における《語り》の形態」は、中上における「物語」への関心の所在についてのこうした捉え方に立って、いわゆる秋幸三部作――『岬』（1975年）・『枯木灘』（1977年）・『地の果て至上の時』（1983年）――を中心に、制度性に抗する〈新たな物語〉のありようを志向した中上における《語り》の特質を、主として表現の形態という観点から明らかにしようとしたものである。

本論文では、まずは総序にあたる第１章において、このような問題の所在が蓮實重彦、四方田犬彦、柄谷行人、渡辺直巳、浅田彰などの先行する所説をも批判的に検討しつつ提示されている。

そして第２章では、『枯木灘』から（１）〈解決なき解決としての物語〉と（２）「裸形の〈対〉」という二つの叙述形態が中上に特徴的な叙述形態として取り出され、これをもって秋幸三部作における《語り》の形態の分析のための視軸にしようとする旨が述べられている。

うち、（１）の〈解決なき解決としての物語〉というのは、師玉氏が吉本隆明の『共同幻想論』における思想的意匠、とりわけ、そこにおいて「廃人の眼」の演じている位相転換作用に着目したところから取り出した概念で、「並置された〈小物語〉に、変奏された〈物語〉を後置し、この接続を解決するための視線の転換を読者に要請することによって、〈抽象領域〉を映現させるという叙述形態」を指していわれている。これが〈解決なき解決としての物語〉と呼ばれるのは、並置される〈小物語〉に、変奏される〈物語〉が

後置され、「廃人の眼」による視線の転換がなされることによって、解決としてのフレームが設定され、イソトピーとしての〈抽象領域〉が実定性をおびて出現するが、しかし同時に、もともと相互に異質なものである〈小物語〉の並置性からくる「比例のスキーム」（ウンベルト・エーコ）的な喩の機能によって、解決としてのフレームが〈小物語〉間の意味論的解決を完遂しきれぬまま、そして時には異なるフレームを重層的に孕みつつ、ひとつの〈物語〉を同定することになるからであるという。このような叙述の形態が『枯木灘』の《語り》のうちにも見いだされるというのが師玉氏の考察結果である。なお、この点についての論証を補強すべく、本論文には「解決なき解決としての物語――『枯木灘』と『共同幻想論』の叙述形態」という論考が補論１として付されている。

これにたいして、（２）の「裸形の〈対〉」は、『枯木灘』の主人公・秋幸の暴力性のうちに立ち現われるのを師玉氏が見てとったもので、秋山駿が「石塊の思想」において述べている「一塊の石ころ」にも似た「現実的な関係性が無化される位相」にあって結ばれる他者との「対」のことである。師玉氏によれば、中上は吉本の「対幻想」概念を取り込んで、その作品世界をつくりあげている。ただ、『枯木灘』の主人公・秋幸の暴力性のうちに立ち現われるのが確認される「裸形の〈対〉」にかんしては、あくまでも具体的な現実を内容として成り立っている吉本の「対幻想」からの分岐が見られ、多くを吉本に負っている中上の意匠のうちでも、中上に固有のものと見なせる部分だという。この「裸形の〈対〉」の契機が〈解決なき解決としての物語〉のダイナミズムの駆動因として据えられている点に、師玉氏は中上の秋幸三部作における《語り》の特筆すべき特徴を見てとるのである。

ついで第３章では、このようにして「裸形の〈対〉」を駆動因として内在させた『枯木灘』における〈解決なき解決としての物語〉のダイナミズムをひとつの表現の形式として捉え返したうえで、その表現形式上の特質を（１）マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』についてのジェフリー・メールマンの『革命と反復』（1977年）とガーヤットリー・チャクラヴォルティ・スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか」（1988年）におけるボナパルティズム的な表象＝代表形態についての考察、（２）ジル・ドゥルーズの『マゾッホとサド』（1967年）におけるサディズム的な表出形態についての分析、（３）ラカン派の精神分析医イグナシオ・マッテ・ブランコが『無限集合としての無意識』（1975年）や「分裂症における基礎的な論理－数学的構造」（1976年）において提示している「バイ・ロジック（複論理）」との相同性において解明することが試み

られている。

また第４章では、補論２として付されている「〈表現〉の幾何――島尾敏雄／吉本隆明試論」における考察への参照を求めつつ、この表現の形式はより厳密には「幾何学的な形式性」として意義づけなおすことができるとされるとともに、とりわけ『地の果て　至上の時』においては《語り》の形態が「物と直結した言葉」への志向性となって立ち現われれていることが指摘される。そして、その〈物〉の位相は、それ自体、二つの方向で現出することが明らかにされる。ひとつは、マルクスの『資本論』への再三再四にわたる参照をとおして現出する「経済的なもの」の領域。もうひとつは、「音」の審級を介在させた「表現そのものの物質性」である。このような〈物〉の位相の、かように二つの方向へと分離しつつも幾何学的な形式性の観点からは通底する顕現のさせ方のうちに、師玉氏は中上が秋幸三部作において発展・深化させていった《語り》の形態の特異性を見てとるのである。

最後に、「結論に代えて」と題された終章では、『枯木灘』と『地の果て　至上の時』に即して析出された以上のような《語り》の形態の特徴――「物と直結した言葉」、ないしは表現の〈物質性〉への志向性――はすでに秋幸三部作の第一作目にあたる『岬』においても萌芽的に現われていたことが確認され、その志向性が『岬』から『枯木灘』と『地の果て　至上の時』へと変化しつつ展開されていったことが意味するところについて若干の所見を披瀝して、論は閉じられている。

以上のような本論文の内容を考慮して、審査には指導委員会を構成する３名の学内委員――上村忠男（学問論／思想史、大学院地域文化研究科教授）、西永良成（フランス文学／フランス思想、外国語学部教授）、柴田勝二（日本文学、外国語学部教授）――に加えて、学外から中沢新一（宗教学、中央大学教授）と磯谷孝（記号論、東京外国語大学名誉教授）の両名に参加を願った。そして審査の結果、論文および最終試験（公開口頭試問）ともに合格との判定を得た。したがって、当審査委員会としては、師玉真理氏は本学大学院地域文化研究科の博士（学術）の学位号を授与されるに十分な資格を有すると判断する。各委員による評価の概要は以下のとおりである。

まず上村委員からは、なによりも〈解決なき解決としての物語〉と「裸形の〈対〉」という二つの叙述形態、なかでも前者の析出努力に高い評価があたえられた。もっとも、こ

の二つの叙述形態を「表現の形式」として捉え返そうとした第３章における論述は全体として多くの論点が未開発の可能性状態のままにつかまれているという感が否めない。しかし、提示されている論点そのものはじつに啓発的であり、師玉氏のゆたかな才能をうかがわせて余りある。今後の展開に期待したいというのが、上村委員の所感であった。

なお、この「今後の展開」ということに関連して、上村委員からは、師玉氏が第４章で『資本論』の「価値形態」についてのマルクスの説明における「「異種」の物の等価、非対称な《等置》へと視線をむける「表現」の措定の仕方」のうちに〈解決なき解決としての物語〉に特有の表現形式を見いだすことができると指摘しながら、「けれどもここではそのことに立ちどまらない」として立ち入った考察をやり過ごしてしまっているが、ここはぜひとも立ちどまって立ち入った考察をしてほしかったとの注文があった。上村委員によれば、「価値形態」論中の「総体的あるいは拡大された価値形態」が「一般的価値形態」へと転換されるプロセスについてのマルクスの論証にはほかでもない師玉氏のいうイソトピー的な〈抽象領域〉の成立と符合する事態が暗示されており、それは師玉氏が中上における《語り》の形態のうちに見てとっているエーコの「比例のスキーム」とそこでのスピヴァクのいう意味での「カタクレーシス（濫喩）」的変換のプロセスにいっそう説得的な論証の装置を提供してくれるはずなのである。

つぎに磯谷委員からは、本論文の特色を従来の文学論的研究の枠をこえて人文・社会科学的観点から中上の《語り》の本質を明らかにしようとした点に見定めたうえで、中上文学の理解のための新しい地平を切り拓こうとした師玉氏の努力に高い評価があたえられた。なかでも磯谷委員が高く評価するのは、師玉氏が中上の秋幸三部作における「物と直結した言葉」の分析・検討をとおして中上に本来的な始原のイマージュへの志向をあらわにし、短編との堅く自然な結びつきを明らかにしえている点である。ただ、磯谷委員からは、従来の文学論的研究の枠をこえた新しい見地から中上芸術の本質を深く掘り下げ、高度の理解に達したことは評価に値するとしながらも、先行の文学論的研究がそれなりに達成してきた成果、とくに小説と物語（説話文学）の関係をはじめとするテクスト論への配慮がかならずしも十分ではなく、そのために師玉氏の意図しているところがいまひとつ不分明なままにとどまっているのが惜しまれるとの指摘があった。

先行の文学論的研究、とりわけ従来の説話論との対決の要点が十分に表現されていないことが師玉氏の研究の位置を不明確にしているとの指摘は、中沢委員によってもなされた。さらに中沢委員からは、師玉氏の研究にはいささかデジャヴ感があり、これが十年前

に出ていれば画期的な研究になったものであろうが、先行研究者の水準を圧倒的に抜き去るにはいたっていないことが惜しまれるとの所感も寄せられた。とはいえ、師玉氏の本論文においては説話の構造をひとつの制度ととらえるポスト構造主義的な視点が中上の秋幸三部作というひとつの具体的な素材をとおして実体的に提示されており、その視点のもとで、説話の環をはみ出し裁ち切りながら語られる物語の思考と倫理を明確に取り出すことに成功しているあたりには非凡なものが認められ、本論文は豊かな可能性を秘めた大いに期待すべき人の仕事として高い評価するに値するというのが、中沢氏の見解であった。

この一方で、柴田委員からは、師玉氏の本論文は、全体の意匠としては、文学と思想の接点を捉えることに重きが置かれ、その着想自体は評価されるべきものであるが、それによって中上の文学世界の独自性を明らかにすることに成功しているとは言いがたいとの所感が寄せられた。柴田委員によれば、師玉氏が本論文において採っている方法は、具体的には中上健次がその小説作品や批評、エッセイなどにおいて語った言葉をさまざまな思想的な言説に結びつけ、そこに潜んでいる〈思想性〉を摘出していくというものである。たとえば『枯木灘』において主人公秋幸の実父龍造が荒々しい破壊的なエネルギーを持つプロレタリアート的な存在であるというところから、ボナパルティズムにかんするメールマンの言説が呼び出され、ボナパルティズム的状況が『枯木灘』を支配しているとされる。あるいは秋幸の労働にかんする意識から『資本論』の言説が喚起されている。しかし、こうした連想による思想的言説への結びつけは、その連関を浮上させることが第一義化されることによって、文学作品の表現としての個別性や具体性を相対化してしまわざるをえないというのである。柴田委員からは、中上の作品世界をボナパルティズムにかんするメールマンの言説や『資本論』におけるマルクスの言説に結びつけることの妥当性／有効性にたいする疑問にくわえて、その結びつけにさいしての論理構築上の難点についての指摘もあった。

しかし、この柴田委員の疑義にたいしては、公開口頭試問の場においてであったが、中沢委員のほうから師玉氏の意図と方法を基本的に妥当であるとする見解が表明された。中沢委員によれば、「モノガタリ」とは本来「過剰した霊力」としての〈モノ〉についての語りのことであったが、伝統的な説話の構造は「過剰した霊力」としての〈モノ〉を法と秩序へと回収していこうとする志向性のうえに成立しているのにたいして、中上はむしろそうした法と秩序への回収から無限に逸脱していく方向をめざした。師玉氏の本論文においては、中上の作品世界がボナパルティズムにかんするメールマンの言説や『資本論』に

おけるマルクスの言説に結びつけられることによって、この中上の〈反・説話〉的方向性が成功裡にあぶりだされているというのであった。

また西永委員からも、師玉氏の本論文は全体として文学論ではなく思想論であり、中上のテクストがそれ自体として分析に付されるよりも、そのテクストを照射するか、テクストの可能性を広げる理論的展開のほうに力が注がれているため、伝統的な文学研究の規範を逸脱しており、おそらく文学研究者からは敬遠されるのではないかとの危惧が表明されたうえで、ただ、文学研究の方法そのものが根本的に問い直されている近年の状況にあっては、このことはかならずしも否定的のみに評価されるべきことではなく、むしろある種の実験的な試みと見なしうるであろうとの見解が表明された。

そのうえで、西永委員からは、師玉氏の本論文は「中上健次における《語り》の形態」と副題にうたっておりながら、その形態が不十分にしか記述されていないことに不満が表明された。西永委員によれば、たしかに師玉氏の言うとおり、中上の物語には伝統的な物語それじたいを解体する意匠が秘められているのは事実であり、それがこの小説家の独創性と魅力をなしているのも事実である。そのことはなによりも彼の文体にうかがわれる。だからこそよけいに、彼独特の語りの形態とその変貌をもっと具体的に、もっと詳細に分析すべきであった。それがないために、せっかく卓見になりそうなものを中途半端にしか収穫しえていないというのであった。同様の不満は柴田委員からも表明された。

しかし、この点については、そもそも師玉氏が《語り》の形態ということで言おうとしているのは表現における形式、それも幾何学的な形式性のことであって、これはむしろ具体性をできるかぎりそぎ落としたところで立ち現われる性質の形式性であり、そうした形式性の析出に挑んで成功をおさめている点にこそ師玉氏の本領がいかんなく発揮されていると見るべきではないのかとの弁護的反論が、上村委員の側からあった。

以上を総括して、審査委員会としては、師玉真理氏の本論文を、従来の文学論的研究の枠をこえて中上健次の作品世界についての新たな読解の地平を切り拓こうとした、意欲的で、かつまた創見に満ちた、可能性ゆたかな論考であり、論理構成の面でいささか不分明な点を残すものの、博士（学術）の学位を授与するのに十分な水準に達していると判断した次第である。

なお、公刊にさいしては、狭く中上健次論という枠にとどめず、むしろ文学研究のため

の新しい批評的視座の確立をめざす師玉氏の意図と方法がより鮮明になるように、補論として付されている２本の論考を主軸にした構成に改め、『文学の唯物論的研究序説』ないしは『表現の幾何』といったようなタイトルのもとで世に問うほうがよいだろうというアドヴァイスが、中沢・西永・上村の３委員からあたえられた。